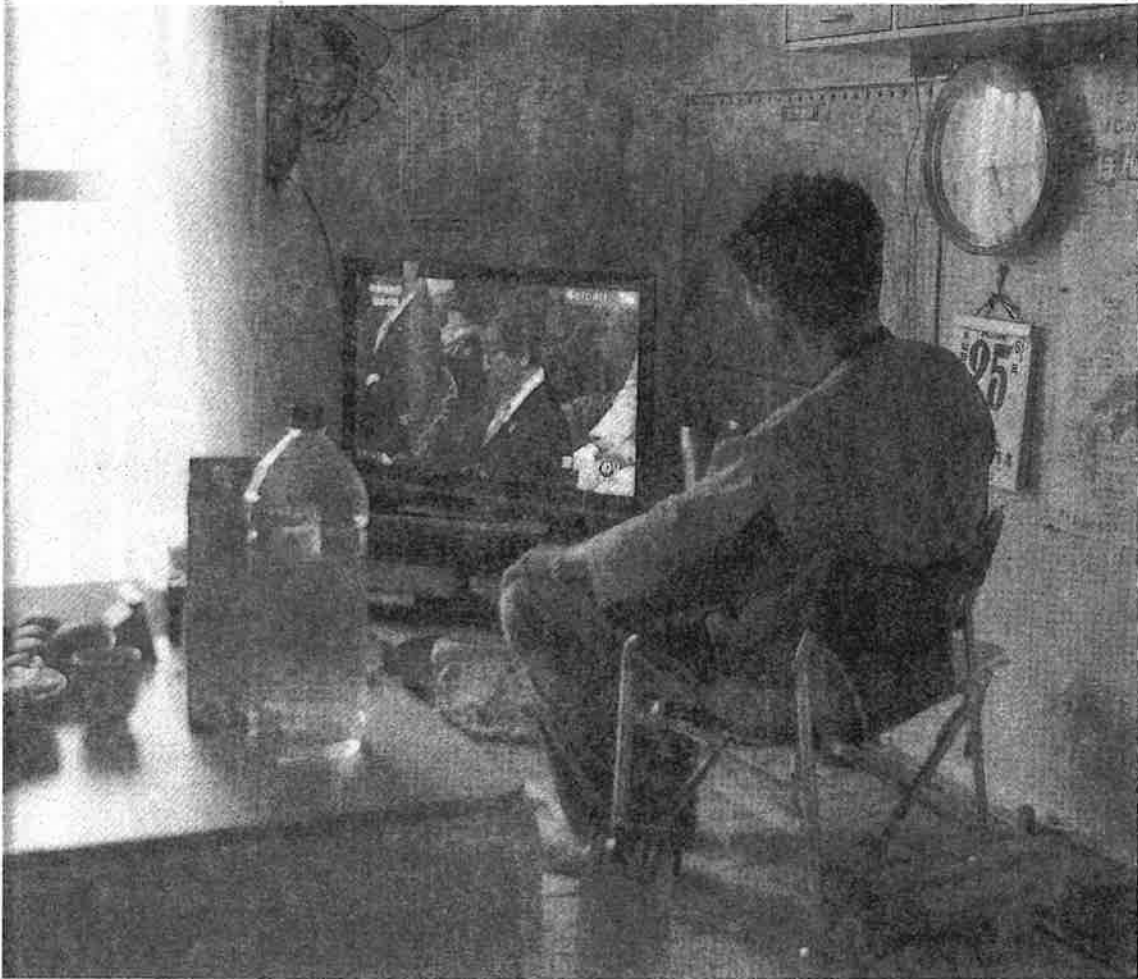


長引く「仮設暮らし」で顕在化

アルコール依存を断て

飲まずにはいられない、先の見えない絶望の日々。しかし、アルコール依存は家族や周囲も追いつめる。被災地で、支援の取り組みが広がりはじめた。



80代の母親と仮設住宅で2人、顔をつきあわせて暮らす。連続飲酒のきっかけは、不眠だった

隣の家の生活音も、家の近くを車が砂利を踏んで走る音もすべて丸聞こえで眠れなぬ。週3回デイサービスに通う以外、階ベツドの上にいる母親と毎日顔をつきあわせる。友人は避難して散り散りになり、将棋を指す相手もいなくなった。

仮設住宅は「棺桶」

警戒区域の解除はいつになるかわからないし、仕事の見えなたたない。自分の将来が見えないことが、一番つらい。

「眠れないし、しらふでいると母親に当たってしまいそう。現状を忘れるためには飲まざるを得ないんです」(男性)

仮設住宅が棺桶に思えてきた。そう、男性はこぼした。

東日本大震災から1年半が過ぎ、アルコール依存症をはじめとする、被災者のアルコール関連の問題が目立つようになってきた。震災直後から国際NGO「世界の医療団」の一員として被災地支援に携わる精神科医の森川すいめいさんは、「震災後1年たつて、アルコール関連の相談がぐっと増えた」と語る。

「震災直後は『1年頑張れば状況が変わるだろう』と思って頑張ってきた。だが、その1年がたつても自分を取り巻く環境は今の仮設住宅はたった2部屋。

「毎日、何がなんだかかわからないですよ」

福島県郡山市の仮設住宅で40代男性はそうつぶやき、テレビの国会中継に視線をやりながら、銀色のマグカップをかたむけた。国会では不毛な論戦が続いている。男性の傍らには4リットル入りの焼酎のボトルと麦茶。濃いに割って、黙々と口に運ぶ。つまみはない。朝9時からずっと飲み続けることもあり、4リットルボトルは1週間あまりで空になる。避難生活を始めてから1年半近く、飲まなかつた日はない。

福島県の沿岸部で田畑をつくる傍ら、近所の工務店の手伝いをしていた。介護の必要な母に犬1匹、猫2匹と暮らし、仕事が終われば仲間と趣味の将棋を指す日々は、「3・11」で原発事故にともなう警戒区域に自宅が入ったことで一変した。

10部屋近くあった自宅に比べ、

良くならないし、自分のつらさも軽減されない。それで一気に酒量が増えてしまうというケースが多いのだと思います」

震災のような大規模災害とアルコール関連問題の相関性については、まだきちんとしたデータはなく、東日本大震災に関しても、現時点でアルコール依存症患者が増えたなどの報告はなされていない。だが、阪神・淡路大震災の時、仮設住宅で「孤独死」した人の多くはアルコール問題を抱えていたともいわれている。宮城県が今年1〜3月

民間賃貸住宅に入居している被災者を対象に行った健康調査では、1%が「朝から飲酒するようになった」と回答している。

新規患者数が10%増

アルコール医療に取り組み精神科医の猪野亜朗・かずみからクリニック(三重県四日市市)副院長が語る。

「朝から飲酒」は依存症とほぼ変わらない。日本全体の依存症患者の数を考えても1%という数は少し多いと感じます」

アルコール依存症の専用治療機関がある東北会病院(仙台市)では、昨年の7月から10月にかけてアルコール問題の新規患者数が例年よりも10%近く増えた。

地域支援課長で精神保健福祉士の鈴木俊博さんは言う。

「今回被災した東北の三陸沿岸部は、飲酒に対してもともと寛容な地域。漁業従事者など、朝から酒を飲んでも非難されない人たちも多かった」

被災前は多少飲酒しても黙認されていたような人たちが、被災後に仮設住宅などの狭い空間、新たなコミュニティでの生活に入ったため、問題が顕在化したケースが多いのではないかと鈴木さんは語る。

久里浜医療センター(旧・久里浜アルコール症センター)、神奈川県横須賀市)所属で精神保健福祉士の藤田さかえさんは今年6月、被災地でのアルコール問題支援の一環として宮城県の仮設住宅を訪れ、実際にアルコール問題を抱える人やその家族と面談した。

問題を抱えていた2人はいずれも男性。そのうち60代男性は震災以降酒量が倍増し、2時間で900ミリリットル入り焼酎を水割りにしてあげ、家族に対して愚痴や非難を浴びせるようになった。同じ仮設住宅に入居していた長男がたまりかねて家を飛び出し、問題が発覚したという。また、70代男性は毎日飲むわけではないが、飲むとだら

しなくなり、道ばたで寝込んだり失禁したりすることから他の住人とトラブルになり、保健師に相談が寄せられたという。いずれも、仮設住宅という狭いコミュニティに入ったことで問題が顕在化したケースといえるだろう。

酒の必要ない人間関係

「家族や周囲の人が問題行動を抑え込もうと頑張りすぎてしまうあまり、疲弊してしまうケースもあります」

と藤田さんが指摘するとおり、被災地のアルコール問題は周囲への悪影響も深刻だ。仮設住宅

の壁は薄く、どなり声や暴れる音は隣家に筒抜け。周囲の目はすぐに冷たくなり、本人だけでなく家族もコミュニティから孤立してしまうケースも少なくないという。

こうした被災者を立ち直らせるには、どうすればいいか。

藤田さんはまず、保健師らがアルコールに関する知識を持ち、本人や家族に対して、アルコールのリスクをきちんと伝えられるようにすることが大事だという。いったん依存症になってしまえば、本人が酒を断つ以外に再起の道はない。周りの支援体制を整えるためにも、正確な知識が欠かせない。

あわせて大事なのが、被災者を再び酒に戻らせない環境作りだ。森川さんが言う。「アルコールが理由で人間関係が絶たれてしまった人にとって、大切なのは人間関係を取り戻し、酒を飲まなくても過ごせる環境を整えることです」

その鍵として期待されるのが、岩手県沿岸部などに配置されている「仮設住宅支援員」だ。これまで、被災者が酒断ちをする過程で支援員が愚痴の聞き相手になったり、仮設住宅の中の集会所に連れて行って話を聞き、時にはカラオケを一緒に楽しんで

だりして友達づきあいをしているケースもあるという。

警察、消防とも連携

森川さんは、「酒に酔って暴れた」「酒で倒れた」という情報を最初につかめる警察や消防にもアルコール依存症の知識を持ってもらい、情報を共有して、関係機関が連携して問題に取り組むべきだと語る。

今年6月には、岩手県釜石市鶴住居地区の保健師らが中心となつて勉強会が開かれ、保健師、支援員や病院、警察、「地域こころのケアセンター」職員らが出席し、情報交換を行った。講師として招かれた森川さんは、その場で、「本人と話すのはしらふの状態の時にすること」「家族を支えてあげること」などを強調して伝えたという。

「断酒会」などの自助グループの協力も欠かせない。自身もアルコール依存症からの回復者で、心理相談室サウダージ室長の前田昭典さんはこう語る。「依存症問題を持つ本人ではなく、まず家族に自助グループを作ってもらい、そこに援助者も参加できる仕組みを整えたい。既に活動している方々とノウハウを伝えるに行こうと考えています」



釜石市の警署で、酒に酔って暴れる人を支援する勉強会に参加した様子。参加者は酒に酔って暴れる様子を見せられた